

# 明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > [佐呂間町農業協同組合](#) JAサロマの災害対応

## 佐呂間町農業協同組合（JAサロマ）（北海道）

### JAサロマの災害対応

カテゴリ 取り組み主体区分：支援組織 運営・経営形態：協同組合等

タグ | [過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例](#) | [被災地での復興経過・プロセス等](#) | [有事の際の対応・リスク管理](#) | [ネットワーク・絆](#)



佐呂間町は平成18年、集中豪雨（10月7～9日）、竜巻（11月9日）と続けて被災し、大きな被害を受けた。畜産経営も、浸水や停電、断水等により生産活動に支障を来した。JAサロマでは、被災した畜産経営に対する支援を行い、災害による影響の軽減を図った。被災農家に対しては、資金対策や融資対策など復旧資金の手当て、災害による収入の落ち込みや経費の増大による収支悪化に対する対策、粗飼料が流失した場合の粗飼料確保対策、蒔き直しする場合の種子確保対策などを定めている。このほか、①災害後の復旧、後片づけ等にはJA職員も対応、②水害により家畜（牛）を避難させる場合には、JAが受け入れ農家を探し、もし受け入れ農家がない場合は、JAの肥育センターや市場にも避難させるように対応、③避難させる家畜の運搬には、JAの家畜運搬車や場合によっては運送業者に依頼する、④搾乳牛の出荷乳は受入農家の収入とする、などを取り決めた。

# 明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > [佐野 貴治](#) 洪水被害の状況と復旧への取り組み

佐野 貴治（北海道）

## 洪水被害の状況と復旧への取り組み

カテゴリ 取り組み主体区分：[畜産経営](#) 運営・経営形態：[個人経営](#) 畜種（畜産経営の場合）：[酪農](#)

タグ | [過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例](#) | [被災地での復興経過・プロセス等](#) | [有事の際の対応・リスク管理](#) | [ネットワーク・絆](#)



佐野貴治さん（酪農経営）は、平成18年10月7～9日にかけての低気圧の影響に伴う記録的な豪雨による河川の増水により、施設と農地が冠水した。また、停電や断水、このほか道路被災による交通の遮断等、営農や生活への影響も大きかったが、被害を少しでも和らげるため臨機応変に対処し、近隣農家や地域の支援もあり速やかな復旧を果たすことができた。搾乳が2日間できなかったため、ほとんどの搾乳牛が乳房炎になり、治療に半年ほどかかったが、この乳房炎が原因で淘汰した牛はほとんどいなかった。乾乳舎・育成舎が浸水し、搾乳牛舎も浸水したので、牛は牛舎の水が引いてから、掃除、消毒が終わるまでの1週間ほど近所の農家に避難させた。浸水したスタックサイロの牧草の半分は廃棄し、半分は給与できた。ロールは、水に浸かっていない部分を使用した。冠水したデントコーン畑は、流入した土砂を春に除去した後、播種してデントコーンを作付けた。

# 明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > [黒河 富茂](#) 竜巻被害の状況と復旧への取り組み

黒河 富茂（北海道）

## 竜巻被害の状況と復旧への取り組み

カテゴリ 取り組み主体区分：[畜産経営](#) 運営・経営形態：[個人経営](#) 畜種（畜産経営の場合）：[酪農](#)

タグ | [過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例](#) | [被災地での復興経過・プロセス等](#) | [有事の際の対応・リスク管理](#) | [ネットワーク・絆](#)



黒河富茂さん（酪農経営）は平成18年11月7日に発生した竜巻により被災。停電、農地にガレキが散乱する等、営農や生活への影響も大きかったが、臨機応変に対処し、近隣農家や地域の支援により、速やかな復旧を果たすことができた。竜巻発生時には、農地で乗っていたトラクターの後部に竜巻に運ばれて飛んできたガレキがぶつかり、ガラスが破損した。竜巻の通り道にあった農地に、竜巻に吸い上げられたガレキが散乱したが、農家仲間、JA、町、ボランティアも手伝いに来てくれてガレキを除去した。しかし、それでも撤去しきれないガレキが残っており、その後もトラクターがバンクする等の被害が発生した。当日13時半～22時頃まで停電し、JAでは発電機を手配してくれたが、停電が短時間だったので使用しなかった。通電後すぐに搾乳をしたので、乳房炎は発生しなかった。

# 明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



HOME > JAにいかっぶ・JA門別・門別町役場 台風被害に遭遇した際の関係機関の対応

## JAにいかっぶ・JA門別・門別町役場（北海道） 台風被害に遭遇した際の関係機関の対応

カテゴリ 取り組み主体区分：支援組織 運営・経営形態：協同組合等

タグ | 過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例 | 被災地での復興経過・プロセス等 | 有事の際の対応・リスク管理 | ネットワーク・絆



農場の前を流れる里平川の水かさが増え、氾濫した

平成15年、北海道日高地域を襲った台風で被災した畜産経営に対して地域の関係機関が連携し、支援を行った。JAにいかっぶ：対策本部を設置。職員等が牛舎に溜まった土砂の除去等の清掃作業を実施し、早期に搾乳が再開できた。また、ほとんどの農地・草地は、次年度の春から使えるようになった。被災農家に対する災害支援資金等の対応も行った。JA門別町：対策本部を設置。停電が発生したため2日目に発電機を4台ほど手配した。断水は日高乳業からタンクに水を積んで供給した。災害で精算が厳しくなった農家にはJA独自の災害支援資金の貸出しを行った。門別町役場：町に対策本部が設けられ、農業関係を産業課が担当した。牛舎内に入った泥を除去した後、洗浄・消毒を行った。消毒液は家保から提供を受け、消毒作業は、農家からの要請により、自防組合が行った。



土砂のほか流木等が堆積した



農場につながる道路の決壊



草地も土砂が流入した



河川に水を飲みに行った乳牛



水が引いた後も凄まじさが伝わる



牛舎外観

過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例



土砂が流入した牛舎内部



機械庫も土砂が流入し、50cmほど堆積した



家の裏手から流れてきた山津波



牛舎と圃場を一気に土砂が飲み込んだ



牛舎前の道は重機でガレキを寄せ、車両の通行を確保した



内部に90cmもの土砂が流入した牛舎

# 明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



HOME > 佐々木 茂 北海道日高地域を襲った台風による洪水被害からの復興

佐々木 茂 (北海道)

## 北海道日高地域を襲った台風による洪水被害からの復興

カテゴリ 取り組み主体区分：畜産経営 運営・経営形態：個人経営 畜種（畜産経営の場合）：酪農

タグ | 過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例 | 被災地での復興経過・プロセス等 | 有事の際の対応・リスク管理 | ネットワーク・絆



機械庫も土砂が流入し、50cmほど堆積した

平成15年8月に北海道日高地方を襲った台風10号により、佐々木茂さん（酪農経営）の農場前の川が氾濫し、牛舎等の施設に濁水が流入。農場に続く道路の決壊、停電、断水もあったが、近隣農家や地域の支援により速やかな復旧を果たした。牛舎に約50cm堆積した土砂は、支援者約20人が毎日、除去作業を行い、発生から5日目には全部の牛を牛舎に入れることができた。ミルクカーは無事だったが、停電したので発電機を持ってきて搾乳した。しかし、集乳車が入れないので、生乳はラグーンに溜めて川に放流。農場に続く道路の崩落で飼料供給がストップし、通常に戻るまでに約1ヵ月を要した。断水対応は発生から4日後には井戸を掘ってポンプで地下水を汲んで与えた。それまでは牛が川に下りて行って水を飲んでた。町では避難場所となった集会場に衛星電話と発電機をセットで備え、連絡体制を整備した。



農場の前を流れる里平川の水かさが増え、氾濫した



土砂のほか流木等が堆積した



農場につながる道路の決壊



草地も土砂が流入した



河川に水を飲みに行った乳牛



水が引いた後も凄まじさが伝わる

過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例



牛舎外観



土砂が流入した牛舎内部



機械庫も土砂が流入し、50cmほど堆積した

Copyright © JAPAN LIVESTOCK INDUSTRY ASSOCIATION (JLIA), All rights reserved.

# 明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



HOME > 青木 良市 北海道日高地域を襲った台風による山津波災害からの復興

青木 良市（北海道）

## 北海道日高地域を襲った台風による山津波災害からの復興

カテゴリ 取り組み主体区分：畜産経営 運営・経営形態：個人経営 畜種（畜産経営の場合）：肉用牛肥育

タグ | 過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例 | 被災地での復興経過・プロセス等 | 有事の際の対応・リスク管理 | ネットワーク・絆



家の裏手から流れてきた山津波

平成15年8月に北海道日高地方を襲った台風10号による集中豪雨は山津波を引き起こし、青木良市さん（肉用牛経営：繁殖牛65頭・乳用種肥育牛770頭）の畜舎や農地、家畜に甚大な被害を及ぼした。直接的被害以外にも、停電や断水、道路被災による交通の遮断等、営農や生活への影響も大きかった。施設用地・畜舎に流れ込んだ土砂は最も高く堆積したところで約3m。家畜が土砂に埋まり、F<sub>1</sub>牛200頭近くが死亡した（5日目に自己保有地に埋却）。水道が壊れ牛用の飲水がなくなったので、知人にポンプと発電機を借りて、被災当日の午後から川の水を汲み上げて牛に飲ませた（水道は1週間で復旧）。草地は5haほど土砂が入り込んだが、翌春までには復旧した。被災時、町に子牛の飲み水確保に給水車を依頼したが、町は人命最優先で、家畜は後回し。自分の家畜への対処は自分で行くことを考えておくこととの教訓を得た。



牛舎と圃場を一気に土砂が飲み込んだ



牛舎前の道は重機でガレキを寄せ、車両の通行を確保した



内部に90cmもの土砂が流入した牛舎

# 明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > [高橋 哲也](#) 北海道日高地域を襲った台風による集中豪雨被害からの復興①

高橋 哲也（北海道）

## 北海道日高地域を襲った台風による集中豪雨被害からの復興①

カテゴリ 取り組み主体区分：[畜産経営](#) 運営・経営形態：[個人経営](#) 畜種（畜産経営の場合）：[酪農](#)

タグ | [過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例](#) | [被災地での復興経過・プロセス等](#) | [有事の際の対応・リスク管理](#) | [ネットワーク・絆](#)



高橋哲也さん（酪農経営）は平成15年8月に北海道日高地方を襲った台風10号による集中豪雨に起因する河川氾濫により、停電や断水、道路被災による交通の遮断等により営農や生活への影響を大きく受けた。農場・住宅の洪水被害はなかったが道路の寸断により外部との行き来ができなくなった。このため集乳車が来られず、1日分の生乳は廃棄。15haの草地に土砂が流入したが、災害復旧の事業で土砂を除去して、翌年には蒔き直した。3日間停電したが、保有していた発電機で対応。しかし、発電能力の関係で、バルク、ミルクカー、パーンクリーナーを同時に動かすことができず、1種類しか動かせなかった。そのため、順番に動かしたが、バルクを満杯にすると冷却に時間がかかるため、半分の頭数ずつ搾乳し、冷却するという方法をとった。今後、使用機器の消費電力量に見合った発電機の整備、環境に負荷をかけない生乳の廃棄方法の検討が必要と考えている。

# 明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > [杉山 憲由](#) 北海道日高地域を襲った台風による集中豪雨被害からの復興②

杉山 憲由 (北海道)

## 北海道日高地域を襲った台風による集中豪雨被害からの復興②

カテゴリ 取り組み主体区分: [畜産経営](#) 運営・経営形態: [個人経営](#) 畜種 (畜産経営の場合): [肉用牛肥育](#)

タグ | [過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例](#) | [被災地での復興経過・プロセス等](#) | [有事の際の対応・リスク管理](#) | [ネットワーク・絆](#)



杉山憲由さん (肉用牛経営: 繁殖牛30頭、F<sub>1</sub>素牛150頭) は平成15年8月に北海道日高地方を襲った台風10号による集中豪雨により、哺育牛舎に土砂が流れ込む、土砂崩れで道路が塞がるなどの被害があった。一番大きな被害は断水である。当農場は高台にあるため、農場まで水が上がらないため、農場の下の方にタンク (1万ℓ) を置き、町の水道水を貯め、そのタンクから自家ポンプで農場・住宅に水を上げるといった2段構えの方法をとっていた。災害時には、町の水道の配管が破損し、水がタンクまで来なくなったので1,000ℓのポリタンクでトラック輸送。分場では井戸水を使っていたが、災害後は水の流れが変わり、枯れてしまったため町の水道に切り替えた。被災時に困窮したことに鑑み、私道の近くの丘に生えている木を伐採するなどの道路維持、新牛舎を建てた際には牛舎の周りに暗渠を入れて水はけ対策、発電機の購入の検討などを行った。

# 明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



HOME > 関 克史 関 裕子 震災を乗り越えた若き牛飼いの道のり

関 克史 関 裕子 (新潟県)

## 震災を乗り越えた若き牛飼いの道のり

カテゴリ 取り組み主体区分: 畜産経営 運営・経営形態: 個人経営 畜種 (畜産経営の場合): 肉用牛肥育

タグ | 過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例 | 被災地での復興経過・プロセス等 | 有事の際の対応・リスク管理 | ネットワーク・絆



平成24年度全農にいがた肉牛枝肉共助会で最優秀賞受賞

経営者は新潟県の間山地にある旧山古志村（現長岡市山古志）で平成15年に肉用牛一貫経営の後継者として就農したが、翌平成16年に発生した新潟県中越地震で被災。牛舎が倒壊し、その下敷きとなって飼養牛73頭中30頭が死亡。水田、採草地、自宅も崩壊し、肉用牛生産基盤と生活基盤を同時に失った。残った牛を1ヵ月後に救出し、仮牛舎に移動したが、衰弱が激しく3頭が死亡・廃用となった。しかし故郷で牛飼いをしたいとの強い思いから、旧山古志村での経営再建を決意し、平成18年に旧山古志村の肉用牛仲間と「山古志肉用牛生産組合」を設立。国、県、市の助成を受けた共同牛舎・施設の建設、県の復興基金を活用した肥育素牛の導入により、平成21年には震災前の飼養頭数を上回る81頭まで経営規模を拡大した。その後は経営の安定化のために生産技術の向上に努めているほか、旧山古志村の伝統行事である「牛の角突き」に参加したり山古志産和牛の串焼きや精肉を販売したり、地域の活性化を図るための活動を展開している。

「日本の牛飼い」を目指して

- 繁殖成績の向上 (繁殖部門)  
分娩間隔 平成23年 11.7ヵ月  
🌸 目標の1年1産を達成
- 枝肉品質の向上 (肥育部門)  
枝肉格付4等級以上率 平成23年 100%  
🌸 目標の95%以上を達成
- 売上高の向上  
肥育牛出荷頭数 平成23年28頭  
🌸 目標の30頭をほぼ達成

関さんの3つの経営目標



倒壊した牛舎



屋外に放された牛



道路が寸断されヘリコプターで輸送される牛



借用した牛舎で。救出された牛と克史さん



完成した共同牛舎 (左: 肥育牛舎、右: 繁殖牛舎)

過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例



畜産物消費拡大イベントで「にいがた和牛」の串焼きを販売



復活した「牛の角突き」

---

Copyright © JAPAN LIVESTOCK INDUSTRY ASSOCIATION (JLIA), All rights reserved.

# 明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



HOME > (株)西垣養鶏場 台風被害からの復興の中で たまごかけご飯専門店開業!! 6次産業化で経営発展と地域振興を目指す

(株)西垣養鶏場 (兵庫県)

## 台風被害からの復興の中でたまごかけご飯専門店開業!! 6次産業化で経営発展と地域振興を目指す

カテゴリ 取り組み主体区分: 畜産経営 運営・経営形態: 株式会社 畜種 (畜産経営の場合): 採卵鶏

タグ | [過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例](#) | [消費者等への理解醸成](#) | [地域を生かした6次産業化](#) |



西垣養鶏場の作業員の皆さん

(株)西垣養鶏場は、平成16年10月に上陸した台風23号により、鶏舎等が浸水するなど被災した。周辺地域は河川の増水による幹線道路の一部崩壊や家屋の浸水などが広範囲に及び、復興は長期にわたった。同社の農産物直売所「百笑館」は、消費者や被災した地域の農業者から営業再開を求められ、被災3日後には営業を再開。遠方から多くの購買者が訪れた。翌18年3月には県の地域復興事業を活用して国内でも先駆けとなる自家産の鶏卵による「たまごかけご飯専門店「但熊」」を開業し、6次産業化と地産地消、地域活性化に取り組む。「但熊」は、地産地消のおいしい「卵」と「米」を提供し多くの消費者の心をつかみ、地域に多くの消費者の集客を促した。さらに平成22年1月には、スイーツ専門店「但熊式番館」を開業、さらなる集客効果を上げている。これらにより、地域に多くの消費者の集客を促し、自己の経営の発展と地域の復興と活性化につなげている。



但東町平田 国道426号



平成16年台風23号による被害 (豊岡市但東町)



西垣養鶏場の全景



たまごかけご飯専門店「但熊」



たまごかけご飯専門店「但熊」

過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例



ネギとノリをのせてどうぞ



ブランド鶏卵「クリタマ」



台風23号による被害 但東町平田 国道426号 但東町赤花

# 明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



HOME > (有)レークヒル牧場 先駆的に6次産業化に取り組んできた酪農事例を襲った地域火山災害の影響

## (有)レークヒル牧場（北海道）

### 先駆的に6次産業化に取り組んできた酪農事例を襲った地域火山災害の影響

カテゴリ 取り組み主体区分：畜産経営 運営・経営形態：特例有限会社 畜種（畜産経営の場合）：酪農

タグ | 過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例 | 消費者等への理解醸成 | 地域を生かした6次産業化 |



農場長の塩野谷孝二氏

(有)レークヒル牧場は、昭和44年に現経営者の義父（3代目）が札幌市近郊現在の洞爺湖畔に移転した。昭和51年に法人化し、平成11年からは放牧の取り組みを開始。自給粗飼料および放牧草の高品質生産とともに、放牧適性のある牛群の造成により、これまでの放牧酪農ではみられない高泌乳を達成しつつ（経産牛1頭当たり年間産乳量8,500kg）、濃厚飼料費の節減を実現している（乳飼比26.4%）。乳製品の加工・販売の取り組みは、平成3年に牧場敷地内にアイスクリーム施設を整備し、翌年から製造・販売を開始。店舗にはレストランも併設している。平成12年の有珠山噴火では、若干の降灰被害ほか、温泉地の避難や観光客の減少、さらには敷設国道の変更（立地条件の変化）に伴う観光客の減少を受けたがそれを乗り越えた。現在は年間多くの研修生を受け入れている。さらに、酪農教育ファームや乳製品販売などを通じて地域や消費者との結びつきも強い経営といえる。



放牧主体で高泌乳牛飼養を実現している



ショップ（左）とレストラン（右）の外観



牧場前を通る国道230号（有珠山噴火時は交通量が激減した）



レストランからは放牧場や羊蹄山が一望できる



店舗内部

# 明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



HOME > (株)山古志アルパカ村 ふれあい動物「アルパカ」の導入による過疎山村地域の復興—新潟中越地震を乗り越えて—

(株)山古志アルパカ村（新潟県）

## ふれあい動物「アルパカ」の導入による過疎山村地域の復興—新潟中越地震を乗り越えて—

カテゴリ 取り組み主体区分：畜産経営 運営・経営形態：株式会社 畜種（畜産経営の場合）：その他

タグ | 過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例 | 被災地での復興経過・プロセス等 | 消費者等への理解醸成 | ネットワーク・絆



山古志地区のアルパカ牧場

新潟県山古志村（現：長岡市山古志地区）は、平成16年10月の新潟県中越地震で全村避難を強いられた。山古志アルパカ村は、域内の2つの集落に「ふれあい牧場」を設置し、その運営を集落内の任意組織の「アルパカ組合」に委託している。ふれあい牧場は、来場者から入場料を一切徴収せず、募金箱を設けて来訪者から一定の収入を得ており、これが出役者の手間代となる。週末には1日当たり約2,000人が当地を訪れ、牧場には住民が育てた野菜を即売する青空市場、昼食を提供するそば屋や土産店が設けられ、地域活性化に貢献している。収入源は、アルパカ生体のリース、イベントの際のレンタル、子畜販売等が柱。愛らしいふれあい動物「アルパカ」が有する「集客力」を存分に活かすことにより集落の活性化を図るとともに、集落住民にもアルパカの世話を通して、一定の収入とやりがいを確保するという、事業展開がなされている。



平日でも賑わっている



募金箱



エサはガチャガチャで売られている



アルパカのエサ（1回100円）

# 明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



HOME > (株)北坂たまご この島を生かす経営

(株)北坂たまご (兵庫県)

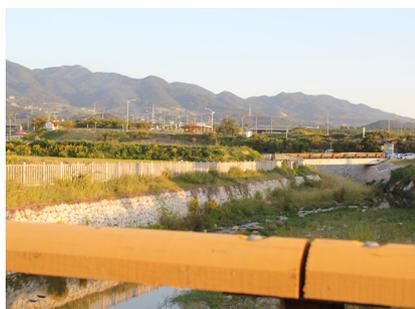
## この島を生かす経営

カテゴリ 取り組み主体区分: 畜産経営 運営・経営形態: 株式会社 畜種 (畜産経営の場合): 採卵鶏  
タグ | 過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例 | 消費者等への理解醸成 | 地域を生かした6次産業化 |



北坂たまごの北坂誠代表

(株)北坂たまごは阪神・淡路大震災の震源地、旧北淡町にある。純国産鶏（さくら・もみじ）を飼養し、年間成鶏平均飼養羽数12万羽の中規模養鶏経営である。生産部門のほか、GPセンターと加工・販売部門を持っており、生産部門は個人経営の北坂養鶏場、加工・販売部門は㈱北坂たまごと経営を分離している。経営主が特に力を入れているのが「ブランディング」である。展示会にも積極的に出展し、プリンやケーキの加工品を通じて卵そのものの本質を伝える努力を惜しまない。また、養鶏場から少し離れた敷地に平飼い小屋を設置して、子どもたちを対象に食育スペースとして活用している。さらに島内の販売拡大を目的に「いるとりどり新聞」を発行し、自社の卵をあげわえる飲食店や自社のイベント情報を掲載するほか、関連する島内の店主や職人などを紹介し、島を盛り上げている。飼料に地元産の魚のアラや米ぬかを加え、高品質な堆肥を地元のホームセンターで安価で販売するなど、島とともに歩む養鶏業を展開している。



育波川から養鶏場のある丘陵地方面を望む。平成16年の台風23号で川は氾濫した



鶏舎内



農協前に設置した自動販売機



消費者を驚きつけさせるきっかけの商品「たまごまるごとプリン」



食育小屋



談話スペース

過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例



談話スペースに飾られた小学生が描いた絵



飼育小屋に設けられた平飼いスペース



いとりどり新聞



いとりどり新聞



いとりどり新聞

# 明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



HOME > (有)大山牧場 外的環境の変化に対応した6次産業化のさきがけ

(有)大山牧場（香川県）

## 外的環境の変化に対応した6次産業化のさきがけ

カテゴリ 取り組み主体区分：畜産経営 運営・経営形態：特例有限会社 畜種（畜産経営の場合）：酪農

タグ | [過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例](#) | [販路再興の取り組み等](#) | [消費者等への理解醸成](#) | [地域を生かした6次産業化](#) |



大山牧場牛舎内（昭和62年にジャージー種飼養に切り替えた）

(有)大山牧場は、昭和63年にジャージー牛28頭を導入。大阪の乳業会社に出荷していたが、平成7年1月の阪神・淡路大震災を契機に生乳処理の多くを県外に依存することの危うさを感じ宅配を始めた。宅配部門での売上高は1,000万円を超えたが、その後、本業の酪農部門が手薄になり、経営全体の純利益が落ち込むことになる。しかし、地道な宅配部門の拡大によって、平成8年から香川県の大手デパートとの取引を開始。その過程で法人化も行った。宅配の拡大とともに自ら売ることを考え、アイスクリーム工房を建設し、開店。困難を乗り越え、県内の有名な洋菓子店3店との連携、プラントの設置、アーケードへの店舗出店などの取り組みを拡大させている。震災を契機として生乳出荷に係るリスクを軽減させ6次化路線を選択・拡大してきた当該経営。6次化という言葉がない時代に先進的に挑戦した実施手順とそのポイントは、現在も十分参考になるモデルである。



大山牧場で製造・販売している牛乳・乳製品



平成11年の「うしおじさん」開店時から販売している手作りパン



平成24年7月には高松丸亀町商店街にも出店した

# 明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



HOME > 横田 清廣 雲仙普賢岳噴火災害でゼロからの再起を誓い、家族の経営参画で3億円を売り上げるブロイラー経営

横田 清廣（長崎県）

## 雲仙普賢岳噴火災害でゼロからの再起を誓い、家族の経営参画で3億円を売り上げるブロイラー経営

カテゴリ 取り組み主体区分：畜産経営 運営・経営形態：個人経営 畜種（畜産経営の場合）：肉用鶏

タグ | 過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例 | 移転による経営再開 | 有事の際の対応・リスク管理 | ネットワーク・絆



横田さん一家

横田清廣さんは、平成2年にブロイラーの専門化に取り組み常時飼養羽数3万羽でスタートし、翌年には5万羽に規模を拡大。しかし平成2年11月の雲仙普賢岳の噴火、翌年6月の大火砕流の発生により住宅、鶏舎、耕地を放棄、平成5年3月まで経営中止を余儀なくされた（この間は水道工事等に従事）。平成5年3月、ゼロからの再起を家族に誓い、隣町の布津町に200aの山林を借入れ、鶏舎を建設し5万羽規模で経営を再開した。現在のブロイラー羽数は被災前の3倍を上回る17万羽、粗生産額は3億円を上回り長崎県下のブロイラー粗生産額の10%を占めるに至る。各鶏舎に自動給餌器・給水装置を整備し、温度管理自動化や鶏舎内照明のLED化、ライブカメラの導入など徹底した省力化と生産性の向上を図る。この結果育成率98.5%等優れた生産成績と収益性の高い経営を実現。そして既に後継者の長男、次男が経営に参画し飼養管理で中核を担っている。



鶏舎の裏側からは雲仙普賢岳が見える



野鳥対策した鶏舎外観



平成20年にLED照明に切り換えた



平成23年に設置したライブカメラ



「ありたどり」のパンフレット

# 明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



HOME > 雲仙生乳生産組合 雲仙普賢岳噴火災害から共同で農用地を集積し酪農再開

## 雲仙生乳生産組合（長崎県）

### 雲仙普賢岳噴火災害から共同で農用地を集積し酪農再開

カテゴリ 取り組み主体区分：畜産経営 運営・経営形態：個人経営 畜種（畜産経営の場合）：酪農

タグ | 過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例 | 移転による経営再開 | 有事の際の対応・リスク管理 | ネットワーク・絆



雲仙生乳生産組合の構成員、左から高原氏、井村氏、川田氏

井村正信さん、高原和光さん、川田範英さん、井村純一さんの4人は、それぞれ酪農経営を行っていたが、平成2年の雲仙普賢岳の噴火、大火砕流等の発生により被災した。住宅、施設等が避難地域であったため、搾乳牛は県内の知人酪農家の空き牛房に分散して預け、育成牛は家畜市場に運び込み泊まり込みで飼養を続けた。4人は、平成5年、雲仙生乳生産組合を設立し、震災復興等の基金事業により牛舎・施設・採草地を整備した。平成11年には又し子価格が低迷したことから、共同で牛舎を建設し、肥育部門を取り入れ所得の向上も図っている。注目すべきは、作業の効率性ととも、将来を見据えたふん尿処理等環境対策に配慮した畜舎・施設用地および採草地の集積である。畜産経営が移転により再開する場合、地域環境に配慮は欠かすことのできない要素であり、当該事例にみる土地集積の活動は参考となる。



平成5年9月に撮影された雲仙普賢岳噴火による災害状況



「活火山と人との共生」をテーマに2009年8月に島原半島が世界ジオパークに認定された



土石流が民家を飲み込んだ



搾乳牛舎



堆肥化施設



乳雄の肥育牛舎

過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例



南島原市の位置

---

Copyright © JAPAN LIVESTOCK INDUSTRY ASSOCIATION (JLIA), All rights reserved.

# 明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > [古川 繁信](#) 雲仙普賢岳噴火災害の被災に負けず、褐毛雌牛1頭の肥育から再スタート

古川 繁信（長崎県）

## 雲仙普賢岳噴火災害の被災に負けず、褐毛雌牛1頭の肥育から再スタート

カテゴリ 取り組み主体区分：[畜産経営](#) 運営・経営形態：[個人経営](#) 畜種（畜産経営の場合）：[肉用牛肥育](#)

タグ | [過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例](#) | [移転による経営再開](#) | [有事の際の対応・リスク管理](#) | [ネットワーク・絆](#)



古川さん親子（左：経営主・繁信さん、中：妻・明美さん、右：後継者・貴憲さん）

古川さんは、平成2年の雲仙普賢岳噴火災害で被災し、平成4年9月、葉タバコ経営から降灰の影響を受けない肉用牛肥育経営に転換。家電メーカーの契約社員で働かたわら、褐毛和種雌牛1頭の肥育から再スタートした。1頭を販売しては2頭の子牛を導入する増頭スタイルを貫き、また、褐毛和種雌牛→褐毛和種去勢牛→黒毛和種雌牛→黒毛和種去勢牛と着実に自己資金を蓄え、より付加価値の高い販売物へと計画的にシフトしてきた。現在の古川さんは、黒毛和種去勢牛200頭を飼養する負債ゼロの極めて健全な経営を实践。特に肉質面で高位安定した成績を取っているが、高い技術力の習得は、同業者との情報交換や視察研修を積極的に行うとともに自ら培った人脈によるところが大きい。早くから飼料の自家配合に取り組み、大幅なコスト低減を実現。平成24年10月開催の長崎和牛全共でも名誉賞に輝くなど、後継者や仲間とともに地域振興に向けた活動を展開している。



自宅に隣接する竹藪を切り開いて確保した牛舎用地



気高系を中心に6割を熊本市場から、残りは県内からの導入を図っている



平成9年に補助事業を活用し建設した牛舎内部



第10回全国和牛能力共進会（長崎全共）での表彰式

# 明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > [宮崎県高原町](#) 町における新燃岳噴火への迅速な対応と畜産振興の取り組み

宮崎県高原町（宮崎県）

## 町における新燃岳噴火への迅速な対応と畜産振興の取り組み

カテゴリ 取り組み主体区分：[支援組織](#) 運営・経営形態：[行政機関](#)

タグ | [過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例](#) | [有事の際の対応・リスク管理](#) |



平成23年1月に52年ぶりに新燃岳が噴火し、「熱風区域」に指定された畜産農家16戸（肉用牛繁殖経営10戸、肉用牛肥育経営2戸、酪農経営4戸）計335頭が避難を行った。町は災害対策本部を設置し、家畜の避難措置を迅速に行った。そのため家畜の死傷等の事故はなかった。その背景には①日ごろの密な連絡体制により、町当局を中心としてスムーズに意志決定がなされたこと、②畜連、JA、関係市町の理解・協力で受け入れ先の確保がなされたこと、③家畜移動の作業は関係機関のほか、畜産農家相互の協力等がなされたこと等である。町は約400戸の農家を対象にアンケートを実施し、今回の被災で何が重要で問題であったか、今後の意向等の把握、対応にも努めている。その結果、繁殖・肥育・酪農等の部門ごとに連絡・意思決定体制について確認すること、避難家畜が増えた場合の対応等、引き続き事例の検証・見直しが必要だとしている。